

## 気鋭のギターリストたちの音楽会

志村 良知

我がギター合奏団『ソフサンデイス』のリーダーN君がプロデュースして新進気鋭のギターリスト二名の演奏会が大倉山記念館で開かれた。

出演はN君所属のギター教室の師範代で、いくつかの国内ギターコンクールで高位入賞経験がある野島史行氏、彼はなんと現職の銀行員である。もう一人は、コンサート・ギターリストとして一家を成す井上仁一郎氏。

約五十人の観客はN君人脈だけに、ギター経験者、ギター教室生徒が大部分で、平均年齢層は二人の奏者の親くらいか。イケメンの井上氏出演とあって女性が多数を占める。

最初に野島氏。ギター弾きなら、一度はと憧れる古典の難曲を、豊かな音量と正確無比のテクニクでコンクールさながらに演奏して満場を唸らせる。

井上氏は多彩な奏法を駆使したギター音楽表現の追求者で、プログラムにはヴェルディから沖縄民謡までの歌曲を自身が編曲したものが並んだ。井上氏の音は、当日使った楽器の特性もあり極めて繊細で、雑音として嫌われる左手指先が弦を擦る音も全くしない。息をするのも憚られる時間だった。

第二部は二重奏。これも全て井上氏の編曲で、自身の説明によると「二本のギターで原曲をどこまで追隨できるか、あるいは原曲を超えて二本のギターならではの表現ができないかを追求した」

弦楽四重奏曲からハイドンの「作品四十二の全4楽章」

ブラスバンド曲から古関祐而の「オリンピック・マーチ」

ギターソロ曲からタルレガの「アルハンブラの思い出」

ギター協奏曲から「アランフェス・第二楽章」

オーケストラ曲からマンシーニの「ひまわり」

そして締めは二人のテーマ曲、「ルンバ・デ・アモール」。「禁じられた遊び」のルンバ版。始め方と終わり方だけ決めてあとは即興という火花散るような演奏がファンの毎回の楽しみになっている。終演とともに花束贈呈のご婦人が何人も並ぶ。

最前列で聴いた仲間のH君との感想は参考になるとかならないとかではなく、ただただ「凄え」だけだった。